貧屋形金雞新

特別
へ 13
3521
6

門 13
號 3521
巻 6

昭和二十九年七月九日 購求

○一河の流れを掬せんと登当夜永代橋合も東に吟ずるに

○兵庫亭にて此ぶ波浪義に旅寝すをゝび淀屋橋のほ〳〵

○まで見ゝ吟じ古事をなぞる米市場のいち早く繁り出ずる

○小説を読死をさぐる[illegible]の秘の蔵

○に夜もこゝ[illegible]眠の覚える水車にさ[illegible]

○形今雖新話と号しも実説とし云ふ

○ゆゝしい大坂小説の米屋の息子花笑柳髙井[illegible]

第六の巻

縣令召滝五

道八匿金雞

忠八追得平

卯木見吾妻

殺人奪金雞

第七の巻

卯木爲代官

滝五縊家督

滝五棄神輿

卯木縛滝五

第八の巻

滝郎苦囹圄

卯木滅旧家

大滝戒卯木

吾妻哭薄命

吾妻騒曲輪

第九の巻

主従大困窮

小笹救吾妻

小笹爲小妻

第十の巻

道八迫小笹

強賊捉小笹

小笹逞謀計

大滝亡剛盗

目録早

浪速の浦の縣令
大滝
左門之佐
信實
神月樓
輝躬
盜まるゝ

三日月
神樹園
清躬
長刀ありて
稲妻
大和の國
葛城の
山寨
籠る
凶賊
小佛太郎
清原
熊種

淀屋形金雞新話巻之六

東武 岳亭主人戯編

縣令召滝五郎

斯て滝五郎い忠八と諸俱ゐ章馱天ぢ〜っるゐ吾家ゐかくゝ早速ゐ袴ひるけ頻て縣令の御飲ゐいらゝゝるゐ大滝左門の佐滝五郎を別室ゐとゝ〜薄茶ゐと佑めて待管ゝゝゐで滝五郎い案ゐ相違〜数多らび拝謝〜て薄茶を吃〜をたゝ偖のめやゝ刀孫今日小性をめ〜めつゐ依て是のゝゝる御叉ゐゝと駭さ怕ゞて茶上つゝまゝゝ侍ひ〜〜ゐ思ひきや却て斯る良茶の御惠ゝゐ預らんとい最もかゝこ

き御覧ぜられて侍るるゆゑと平伏して云々ゑび大滝丹五郎
て云やう不易ゆ呼らんが然思ふも断りなり今日汝を呼つ
るは別のことゆ有ば吾家ゆ一箇の白銀の雑あり然れと
ども是は雌鳥なり汝が家ゆ黄金の雑の雄の方をもとう
と宜ふ吾家のも汝がのも俱ゆ足利家より給はりし物なれば
倘くは同作の物なるらんと思ふかゆ一度は是を合せうち双
べて見んかのと豫て思ひ居るなれば偖こそ汝を呼つる
なれ極めて大節の宝貝ゆは有つるんなれば願くは一日持
きなりて吾ゆ見せよと曰ひなるゆぞ滝五郎頭首して答
て云やうこは可嘲なる御言葉をかうなり侍り假令ひなる計

なれ大節なる宝貝ゆも せん君の命つけらるゆ於ては誰か
固辞奉るものは有んや即日持参つりて尊覧ゆ入べ
きなりと御答まうしゆぞ左門の佐大のゆ悟怡らるひ
丈より御盃なるど給りなるゆぞ左右して間どり末の時ぐ
る頃おん暇間をかうむりて吾家をさして帰りなり

道八匿金雑

偖も井戸屋ゆは今日滝五郎縣令ゆめさるとて飯くいとく
遅かりけるゆぞ渾家ゆは只管きづかひ案じ暮して待居
る時なる滝五郎勇々として飯う来り縣令の御歓ゆ
容子を委しく語りなるとて人々ちぐめて安堵の思ひをな

ぬ父滝右エ門是を聞て打よろこびて云やう縣令の命と
あらば時の間も遅くあるべしん大最かなる疾々宝貝を把
ぐして片時も早く持まゐりて尊賢に入よかしと老の一
道に迫さるゆゑ然ばとて滝五郎老頭の道ハをよびけ
るゞ道ハい今朝のゆゑどよりゝ風の心地ゆて打臥るゆゑ主
管の忠八を呼てやゞて宝蔵を開き奥ふかく納め置
らる宝貝の金雑をとり出して父滝ゑのん諸俱ゆ笠よう
出して得と査勘然して又箱に納め其上を綿の服紗ゆ
て包て滝五郎再度文度をとらのゝ金雑を携へて店頭
まで出るる處ゆ今日道ハゞ風の心地ゆて打ふるゆようて

宅原を迎へゆ遣るるゆゑ高麗早速ゆ入まゐて道ハ
ゞ脉を伺ひ是當ゆんの風ゆり出ハとく治るべし然る葛
根湯一二ゆ進べしと呑て汗ゆ入ぬ出ても故心と
ゆるゆと言て店の間へ立出蔡匣をとりのゝ葛根湯を
調合ゆる處へ滝五郎出来り高麗を見て旦居りけるゞ
た久しく見え進ぜざりしゆ暫し御顔を拝しつゝ
と大喜悦しく待ゆり小笠も異るく侍ゆやとて云ゆ
高麗が曰く滝君いゆるゆゑゆ此程いさゝゆ吾方をとゝ
玉ゆぬゞ娘小笠も日毎こゞゆて待ゆとゝ侍の近来人のゝ
さゆゆゞが滝君ハゞゆの神ざゝの花街へ通ひゆるとさゝぬ

夫は宜しかるべき事なれども此二女つゝしみなべてと云ける
るを滝五郎聞へて云やう先生さる事を曰ふる小生
らのわどもは管閑〳〵見玉ふごとく道八は敗てをり父
君は病後なり彼も是も小生一人をでは今日ごと朝ま
ぐれより縣令へめさるゝ唯今飯より是より再度まゐるは
て侍ふのとの人だ高無おどろかれ夫は又何ホの問合せは
て召るゝとのひ〳〵ぞある墨慮やと云々とゞ滝五郎が曰く先
生太くる駭れ豫て吾家は死持ける處の黄金の
雑をと縣令どの〳〵見玉ふんとあるはつれ今より持て参る
とてろなり則ち此服紗はつゝまる匣彼黄金の雑は

侍るなりと云を聞て高無〳〵ち其箱を片づけ紫
の服紗はつゝまる薄匣のなかは黄金の雑を藏〳〵玉は夫は誰なれも知ところ
う當家は黄金の雑を藏〳〵玉は夫は誰なれも知ところ
なれども一皇はひと度の虫干より外は出〳〵玉はね宝貝
なれば〳〵他の人の見ること恨はね物なり愚老今日斯る處
へ参り合〳〵はよるれば僥倖とおひつべ〳〵願くは其金雑愚
老は一目をぐませの人と云るはぞ滝五郎此〳〵迷惑の
面色は先生は是より一宗ともるべれ御方るとゞ何刻
はても見られ〳〵身なり吾僕今より縣令へ参〳〵んとはるは
早日暮は近づれるとゞ心遍を侍るなり然ど今見はつて

免〳〵めくと断りくるを高無尚も察さるよせ世俗の俚言ゐ云んと欲すれる支い遅く云べ〳〵見んと欲ふる支い疾速べ〳〵といくり左ゐ右善いそぐよ〳〵疾出〳〵て見せの人更ゐ間をがと〳〵せ〳〵めくをと強ちゐ迫めくるゐめぞ時あ〳〵しとて思へども詐術ゐ〳〵て滝五郎彼ちをを引よせて服紗づくを解わど元蓋ゐ〳〵あけて中より黄金の雑をとりぶ〳〵くれで高弁い仕金雑を手ゐとりて数多〳〵びゐ〳〵頂き〳〵くと打見るゐ寔ゐこ此の金の無垢ゐて錆あげくる物ゐを亡晃々赫々と〳〵て怕明むかり雑冠より尾毛ゐ〳〵くるまで彫めめ〳〵仔細ゐくこ目を駭ゐ計りくり滝五郎高無ゐ

謂て曰く是唐土玄宗皇帝の愛器ゐて有名を鹿苑院義満公のとゐ我日本へとくり足利家の宝蔵ゐをさめあり〳〵を御尚の年吾父君浪閣寺ゐ清泉をくり得くるを恩賞ゐ義政公より給くくる死ゆ〳〵て小生ゐ家八畳一の宝貝うり然も一箇のゐ〳〵だあり此雑ちゐ紀邉ゐ死へゐるとゐ元ゐ勿ち色を変〳〵て頻りゐ鳴ぬ去ゐ池川ゐどゐ人の落て死くるをり死骸のちをとざる時い仕金雑を抜ゐのせく〳〵水ゐ流ゐ死骸あるとくるゐ到りて忽ち仕雑色を発ゐ変をりて其死躰をひゐ揚る正ゐこの雑くゐを人ゐ嫌ひて鳴ゐや又い死人あるを人ゐ告るゐや一向ゐ分ちぐ〳〵とゐへど

高市井戸屋の
重宝金雞を
一見す道八忽
ち好計をたくむ

高さゝ

も然るべき是一ツの奇ゐい侍りぬやと物語りなるべく高
無い耳を欹て〻是を聞かの金雑をゆく〻びら頂きつ〻
大へ有畏げゐ拝〻けり次の間ゐゐ〻居らう老頭の道八こ
の支を突つけ滑と床の裡ようう坂出来り紙戸の間ようさし
のぞこれ仏容子を伺ひ居らう斯とい二人い更ゐ知ぬ高無こ
の金雑を見えをとうゐるをび滝五郎い再度これを匣ゐきめ
原ゐごて〻綿の服紗ゐつこける死ゐ奥ようう丁稚一人まり
来う郎君今父君のめ〻ゐるゐ疾奥へ行玉へとのゐぞ
滝五郎い金雑の匣づこを薄匣子の一遍の高無ゐ乗匣と
う〻べゐれて奥ゐらうぬ高無いゐとゐ残りやゞて一人の丁稚

をよびて云やう愚老今よう去方へ詩會ゐて参りるをび我
茱萸を預けゐれて行ようゐ炊時店のかゝゐ置て呉よ天晩
うで奴子をとうゐ越ぬべ〻と云けをび丁稚きて命こうろ
え侍ひゐと応へ〻う斯て高無い店頭ゐ立出奴子の得平
を呼てらやう汝その扶こを匣をそ〻ゐ片よせ置て我
を送りて坂日筋まで行べ〻然て又帰りゐ妻ゐ来り茱
萸匣をとりて持ゐ〻よと云をび奴子い心得草履を正し
高無い奴子を引つれ坂日筋へとので行〻う次の間ゐ〻
居らう老頭の道八い臥床をそと起出て一遍を伺ひ忍び
店頭ゐ人無を見合せ刎を出来りかの高無ゐ〻あづけ置

らる茶函の服紗を解まゝ黄金の雛をつゝみし服紗をも
解ほどき金雛の服紗にて茶たてしをつゝみ茶匣子の服紗
にて金雛の筥をつゝみかへ茶筥を金雛の匣子と見せかけ
簿筺のかはりに置りの金雛の筺づゝみをそと携へし椽
側づたひ庭に立いで片ほとりに塵塚のありける中へ埋み上に
木の葉をおほひて隠しおきぬ然して又忍足に臥床にゆく
ぐらり空知ぬふりして依居たり斯とも知ぬ滝五郎たんお
への室より出来り簿筺のかはりにおきし金雛のふくさ
包みを把あげて一人の丁児にもたせ縣令の御館へ出て往
行ぬ

忠八追二得平一

濁雲月を覆ふと雖も清風来つてこれを露す此時井戸屋
の庭前へ奈何して入来にけん一隻の大猫を咥後て走り入
るを滝ゑのん是を見つけ声を発て奴子をよび彼太が
猫をおひかけて庭に入りしぞ疾追かけせよと分付けるにぞ命
せ心得侍ひぬと二三人の奴僕ども手に手に捧を推とり
のべ彼太を追まはしけるに太は打ゆぐと騒めぐるを千載の工去
けし垣下のあひだ其首実とあひまはし竟にかの塵塚の
あたりに追つめ再三に打居けるにぞ太は口に貪啣くるひろの
塵塚をうちちらし幸うじて切扉のもとへ走りいで何処

とゐゐ〳〵逃去りて迹ゐて奴僕ども常をとり乗り散ぶい
らう木の葉をたゝ紀よゐてんとして何心ゐ〳〵目をとゞ木の葉の間
より紫の服紗ゐつゝこゝる箱の如きゐの見えるゐぞ不思
議ゐ思ひとり出〳〵是何ゐ有んと云ひとゝ紀掾側ゐ立
居ゐる丁稚ことを見てゐやう丈ゐ鶴ゐ高毋老の預けお
紀ゐひ〳〵合葉函ゐて倨ゐとゐ滝ゐゐん傍ゐゐりて是を
見て大静の丁稚を呼ぶ〳〵たゐゐ叱つて云やう高毋の預
けゐる也〳〵葉匣子を誰ぞゐて塵塚の中へ置〳〵ゐ紀つる
ぞ老人とゐの高毋ゐ我家の一宗とゐるべ紀人ゐう尋常の
按摩禿子ゐと一個ゐゐ斯ゐ害行ゐを〳〵つゐ甚じ

きえせどゐう山後ゐ〳〵ゐ斯樣の戯をへゐゐべゐ〳〵ゐビと
云ゐゐゐ丁稚ども者ゐ童ゐゐ中ゐゐ山葉たることを匿
しつる者一人も侍のゐと云けるを滝ゐゐん増々喝ゐゐゐぞ
丁稚どもゐ恐ゐて皆逃のゐる滝ゐゐん下僕らゐ分付
てその葉匣子とゝ高毋ゐゐ持行て皈〳〵来ゐと命じ
ゐゐゐゐゐ奴子ゐ心得候ゐと恋〳〵てやうで山葉函を店前ゐも
てゐで残〳〵ゐ〳〵挾箱の中へ出入引連んとゐる處へ高毋
ゐ奴子得手来ゐゐゐぞ井戸屋の下僕らゐゐやう得手ぬ
〳〵よくこゝそ来ゐゐゐと今〳〵山葉匣子を伜ゐ方へゐて行
ゐと家公の命ゐようて持出んとゐ〳〵延ゐゐ今伜ゐ来う

しいことよろこび五郎が僥倖ゐう疾某箱めて行ねと得
平ゐとゝゝ〻ゝ〻び得平是をうけとりて是有雑〻〻と一禮
のべ井戸屋の奴子ゐ内ゐゐう得平ゐ挾箱ゐち擔げ外面
をさゝして出行ゝゝ入晉つて滝五郎丁雅ゐ袋をうとげさ
せ大汗ゐろつて走飯〻〻太息ついで庫〻居る中の間より
王管の忠八立出てこゐ郎君のゐろゝゝび然まで大汗ゐる
ゐて駈帰〻玉ひ〻ぞ心得がゝられてゐてと云々れが滝五
郎がいゝゝや〻偖もみ〻ざるをあり五郎今縣令どの御
前ゐいで此綿の服紗をひゝき黄金の雑を出さんとまゝ
ゐ思ハざゐれゐ箱ゐこゐ高無が某器ゐてあゐゐれが縣令

どの御まゝゐ斯ゐ鬱気ゐるものを持いで何とも詞説
ゐ〻〻只赤面〻て面目をうゝるひ漸々暫〻の御日延を
ねがひ斯ごゝく汗ゐろつて駈かゝゝゐるゐう抑何かゐが斯ゐる
悪行をゐ〻ゐれて五郎をゝて苦〻ませ〻支よとて温雲
て云々ゝゝび忠八是を笑て大のゐ駭れ夫ハ心得がゝれてそ
侍へ此御家ゐ仕ゐる者ゐの金の雑を大節ゐる品とのゐ
ことを知ざゐる者一人もゐ〻然が奴子丁雅ゐゝゐるまで誰が戯
ゝゝゐ是を入晉侍ゐんや思のゐ是ゝ御家の裡ゐゝ宝貝ゐ
目をあゝゐ獅子身中の虫ゐゐゐ〻と云けゝび滝五郎
も膝をゝゝめ五郎も向ゐう然思ひ居るぞゐ〻と二人頭を

突合せ女時言ても無うく父の滝右エ門は夏を空て臭よ
ま走り出来り吾家の金雞ゞ茱萸と入昔〳〵と偖も怪
〳〵夏わらそあと獨ゐ下僕どもゞ太を追へ〳〵とゆ、塵塚の
間より高無ゞくはり篋を見出〳〵つゝが早速あらうて遣〳〵
〳〵然るゐ又爰ゐも高く冊ゞ茱萸とい太もく〳〵心得
ざる夏ゐと云忠八ゞのゐやう然〳〵ゞ金雞の服紗をとり
て山茱萸子をつゝと宝貝の雞と思さを郎君ゐりこせやう
金雞をゞは茱のゐくさゐ色と茱萸と見せて塵塚の間ゐ
置〳〵あれつる物ゐ〳〵んとと云々ゝゝゝ滝名めん是を空て倘然
ゐゝゝゞ高無ゞ発意ゐて掠めとるゐゐ有ざるゐ滝五郎ゞ曰

く否〳〵高無ゐ欲心ゐゐ死者ゐて侍へども中〳〵ゐ然悪
行ゐ〳〵〳〵得ぬ老人ゐゐ是何ゝ外ゐ仔細のある夏ゐ〳〵
と三人百般ゐゐ合て女〳〵〳〵時を夏掠〳〵ゐる老頭の道
八ゐ吾好計ゐひちゞひて却ゐて今ゐ女〳〵〳〵里慮とゐゐ
ゐ斯ゐ騒ぎゐ知ゞゞゐゐさゞ宜〳〵かゞゞと思ひつゝゞ頭
て臥床ゐゐ起出来ゐ偖ゐ黄金の雞を失ひ玉ひ〳〵とゐ吾
佛ゐゐ〳〵も冦邪ゐ犯さゝゝて打臥をゝゞ何夏をも考〳〵
詮ゞゐゐゐ忠八ゞ兼忽ゐゐ吾〳〵ゐ冦ゐ乳ゐて引篋ゐ
あゝゞゞ伝店ゐをゐて何ゐと意を付ゐゐ〳〵ゞ斯ゐ過禍ゐ起
ゐゐ〳〵ゞゞゐゐ何死ゐゐ引ゐゐて店頭を守〳〵ゐゐ偖〳〵

斯る過ちも発るゐあゞと又郎君も郎君ゐて侍へ大節うる
家の宝貝を店頭るどゐあゞる玉ゝとかゝ奥へ持行ゐゐとも又
た小生ゞ拵ゝと入るゝと置ゐゝ別の仔細ゝ有べゝゞ漫ゝゐ
丁雅らゐまゐせゐゞる玉ゝかゝゐ斯翅語もゐるゐて侍へ何
ゞ是ゝ奴子らゞ中ゐ盗人ゐるゐ疑ひるゝ然るゞゝ其盗賊
の僉議ゝ跡ゐてさゞゝ左右旦高帛ゞ方へ人をやりて御問ゐ
送ゝ玉ひゝ紫の服紗ゝこの管をとゝ戻ゝゐ人とりゐ滝五
ゐんも滝五郎も是理うゝと思ひるゞゞ然ゞ旦奴子を呼
べゝと云るゝを忠八ゞらゝやゝ斯る支ゐゝ奴僕らゐてゝ洋分
らゞゞ小生一走ゝ行て訊ゐ来るべゝと言ゝけゝ滝五ゐゐん親子

ゐろとゐゐ然ゞ你とゝ行て疾とゝ返ゝゝ来ゞよゝと詞の下
よゝ忠八ゝ把ゐゐも採ゐゝゞ外の方へ走ゝ出宅原さゝて
ゞ急ゞ行る

卯木見吾妻

爰ゐ又縣令大滝左門の佐ゞ家士とゝるゝ卯木佐和弥
大ゝ主人ゝゝ他出を止めらゞるゞゝ家ゐのゝ引籠
つゝて居るゝゝゞ或時風と心中ゐ思ゐやゝ吾主人の分付を
守ゝて久ゝゝく雑波の景色をゝゞゞ此ゝどゝ空ゐゝとゝ長
閑ゐて挑さゝゝの花も今さかりるゝゞゝ先やゝゐるん主人ゐ
隠ゞゞて雑波のゝゝの風景をゝるゞめゞゝどの賛氣をも晴さ

ぞやと思ひ大滝どのゝ病乳と披露〳〵深編笠ゐ面をかく
〳〵密ゐ茅舎をあのび出て其首か〳〵と斡びある紀計ら
ども神祭の花街のそとゐ到るゝぶ佐和弥太夫と思ゐ
やう五吾の年ゐ到るまで未ぞ一度も神祭の花街の風景
を見ぞ然ぞ今日こそ花街のゝ〳〵紀を見るゝ紀の時ゐゝゝ紀
と猶ゝ点頭つゝ行ゝゝぶ竟ゐ曲揃の内ゐゝゝ頭をめぐゝ
〳〵て詠紀ぞ千門万戸覆をゝゝゝ燦々ゝゝる画障をつゝね
数千の游び女よそそひをゝ〳〵家々ゐ客人を待ゐゝゝる佐
和弥太ゝゝを見て初めて駭き吾も男と生紀ゝゝ斯る
花境ゐ一夜さも未〳〵ぞゝ〳〵ゝ何ゝゝゝゝゝん人ゐ語〳〵ださ

もゝゝ太く笑ゐ〳〵ゐ嗚呼〳〵ちよゝ紀景色ゝゝゝと只ゐ管ゝゝ
めて彷徨ゝゝ時ゝ〳〵彼方の揚屋ゝゝ一人の游君さゐで
紅粉の粧ひもせざゝゝゝ紀ども其美麗さ譬んゐ物ゐく廣
寒宮女の天降ゝゝ衣通小町の再来ゝと女時ゐ紀紀く
打詠め〳〵ゝ忽ち一遑ゐ一人の老婆の居ゝゝを見つけ立よ
ゝて問けるやう今彼死ゐ紀つゝ游女ゐ何とのくゝ名ゝゝぞ
と訊ねゝ紀ども老婆ゐ答てかの君ゐ今廓ゐ一と業ゝ〳〵美
木屋の吾妻とゝゝゝ游君ゐて侍ゝとのゐ佐和弥太ゝゝ曰く
吾今宵彼君を揚て一夜心を慰ゆんと思ゝゝゝゝゝゝ作ゝ紀を
漏慰てゝゐんや黄金ゐ幾許ゝゝとも遣にゝ〳〵と云ゝ紀ゐ老

佐兵衛
忠八
得平
二人を殺し
金箱を
とく平

婆が曰くかの吾妻の君い井戸屋滝五郎とりくろ人よう揚語ゆーて置ゝ〜ゐ乙が余の客人ゐい逢玉ひぢと咎へくるゐど佐和弥太ゝ是を聞て大のゐ力を失ひ又心ゐ思へらく彼井戸屋滝五郎いあぐま屋東作が古井戸を穿ちて数万両の黄金を設け吾い其古井の爲ゐ妻くゐ人を損ひこゐ雑波を道乙さう万福上人の助けゐよりて縣令どのゐ仕へるとりくどゐ未ぐゐ外面を白昼ゐ歩くと能ひぢ斯編笠ゐて人目をまのび懐中寂〜く呻吟ふう是ゐ引く滝五郎い山廓一の吾妻をさ人揚づゆゆ〜て置身とふる思ひきや吾ゐ彼ゐ同じ一箇の古井を穿ちるぐう斯まで貧福の別めあ〜んとゐ原ふう天の爲る所ゐい有べくんどもいとロ惜きうぢふうふうと思ひぢ泪をたく〜と流〜拳を握てたて立ふ〜ぐ山時早日い全く暮て家毎ゐ燈火をてんじ軒毎ゐ鉤燈をか〜く若干の游客どもおのぐ百般ふうまあひ唄ひ騒ぎて入来ぢび游君ホい行ちぐひ歌妓幇間いか〜ま〜〜〜面白ひ最中とふ乙どゐ佐和弥太ゝ気をふ〜〜ふひ心一向ゐ楽まるゐ忽ち廓中を走ういで疾飯らんと急ぢ〜神崎川の邉りゐいふうぬ

殺人奪金雑

宅原高帋ぐ下僕得平い井戸屋ふう立出て荻菅の棒

尾ゐ提灯を結びさげ鞠謡ひをうたひつゝ閑々と帰り行
きとでゐ家居近くまうて神ざれ川の邊りを過りくるとた
遥ゐ後のうしろより大声ゐてやよ待ゐく得平ぬゝ扶時ま
ちね得平よと只管ゐよぶ者あり得平ハ吾名を呼ま
何ぞやゝんと立止り暫ゝ猶豫相待ところへ井戸屋の主
管忠八ハ息をきりて駈来り漸々ゐ近づたる得平是
を見て云けるやう吾佛を呼ゝハ忠八ぬゝろ何ゐの用
ぞと問くるとゞ忠八がいふやう然ゞゐや一大事の要事ゐり
御ゐ汝ゐ逓与つる某匣子と井戸屋の御家の重宝黄
金の雞と入替りて有るとゞ今把度ゝゐ来つるゆり疾々

とゐれゐ返ゝてゐひきと云々たゞ得平ゞりゐやう偖ハ然こと
ゐて有くくハ吾佛も仏某慈の常ハう今宵ハ重かゝ
ゐ太最ゐゝたゐ思ひゝゐうと云つゝ提灯とたゞ解き川
邊の松の枝ゐひ付挾箱の蓋ゐゝ排除の服紗づゝを
を開たるゐ実ゐ是某ゞとゐいわゝゞ却て一箇の桐の
白木の笹ゐうけるゐゞ得平ハあどろたゞ忠八ハ打喜怡やぶ
て仏函を引出ゝ得平ゐ一礼のべ忽ち行んとする処を得平
忠八ゞ袂をひく井戸屋の御家の宝とする黄金の雞ハ東
山どのよう給うる物ゐゝて吾日本ゐ復とうたる宝貝ゐり
然ゞ吾佛ゞゞたる下土下郎ハ生産見る度の品ハぬゐる

願くは忠八ぬ〜仆死して一目拜ませてくびをとらへ忠八
がいとやう你が死望理うるをとども斯る途中ゐてとり扱ひぐ
れ物ゐい有ば其上家ゐい家公こちロハ管案して待てくび給
へべ今宵ハ旦免せう〜吾も心の迫るうとらへべ得平てくひ
て今既ゐ途中ゐて取扱ゐて居ゐい有ばや吾佛是を連
きて倘用ありて外へ廻う你ゐ逢ばが何とう〜ゐの畢竟爰ゐ
て逢うれがこそ然云ゐ〜ん假令家公の待てくびゐとも在て一
目拜ませうれよ吾佛給支てくのち国への土産ゐいろうう
と平等せうう逼むるゐど忠八ちらゐ困ど果て詮術なく童
をひ〜れ中よう黄金の雑を出〜得平ゐうせくゐど得平

て提灯をとり下〜蝋燭の心つまを切かの金雑をゐ〜頂き
〜平天賞〜て是をゐるる忠八ハ傷ゐあって謂て曰く仆雑
は唐土玄宗皇帝とらへくるる天子の愛器ゐてゐる〜ゐるる近
きころ日本へゐるう足利家の重宝ゐる〜を吾主人へ給ゐう
て世ゐ二つゐれ宝貝ゐう仆雑の近ゐとうゐ死人ゐるとれ
いゐ立地を発〜てゐくとらへく殊ゐ一身黄金ゐて作てこれ
だ千万金ゐも換ぐゐれ大節の物ゐ〜て実ゐ你や吾們
ぐどれ下主の手ゐ解べを物ゐいゐ〜ばと仔細と悟〜ける仆時一盞の松
を得平ハ平よろこび手を合〜てそ拜まける仆時一盞の松
蔭よう一人の男顔さ〜出〜仆金雑を詠め居ゐう忠八ハ驚

急ぶ金雞を宮ぶ入得平ぶ別れも告げず帰くまんと
なる死ぶ松の樹の間より一人の侍あらのをのぞ刀閃くと殺
さるる忠八を後身より大袈裟ぶ伐るるとが叱とだあらさ
倒れたと得平ぶ是を見て驚き逃んとなる死をある侍を
腰のあるを薙放てば是も同じく倒れと死ぬ今二人
を殺しつる山侍ぶ何かのぞ是則ち卯木佐和弥太郎なる山
二人を伐たて一遍を窺ぶ目をくぐる刀の血をぶ〜のこる時
〜かの童の中ぶ黄金の雞こを発てなく度る鳴ぶる佐
和弥太是を見て心中ぶ平おどろ紀井戸屋の宝貝の金雞
い傍るぶ死人ある時ぶ色を発ぬと笑つぶ今山二人を殺〜さ